

伝統芸能 吉祥院六齋念仏踊り

保存団体 吉祥院六齋保存会



京のまつり・年中行事「切り絵」より
八月二十五日 吉祥院六齋念仏踊り 吉祥院天満宮

吉祥院の六齋念仏踊り



吉祥院六齋念仏踊りとは、京都市南区吉祥院の近郊農村地域に伝わる芸能として、笛、鉦、太鼓の祇園囃子、太鼓の曲打ち、獅子と土蜘蛛等で市民や観光客に親しまれる六齋念仏踊りです。毎年4月25日（春季大祭）、8月25日（夏季大祭）の吉祥院天満宮舞楽殿で六齋奉納が行われます。

久世地域、壬生地域、中堂寺地域など各地に伝わる六齋念仏も細かく見れば、地域ごとに特色を持ち、演目にもいくらかの違いがあります。しかし、共通して言えることは、千年以上続いた伝統の誇りと、厳しい稽古が生み出したことと民衆芸能であるという喜びが根強く流れ支えとなっています。

現在は、年齢制限がうやむやになり、老壮年が演じていても怪しめないが、戦前まで六齋念仏は、空也堂系の全部が15～30歳、あるいは35歳までの青年会で運営され、上演される決まりが厳しく守られてきました。

その六齋の修行を通じて、青年期の人間形

成がなされたことを懐かしがる人が多いのも六齋念仏の支えでした。

吉祥院天満宮は、菅原道真ゆかりの地として、太宰府に流された道真を偲ぶ気風が、空也上人の鉦・太鼓念仏を熱意を持って稽古させる伝統であるという人もいます。

念仏を広める本来の鉦講の精神は、江戸時代の能狂言から種々の演目が入って、芸能化して以来、徐々に少なくなっています。現在では、最初の「発願」も形式化していますが、娯楽のない江戸、明治、大正期を通じて、地元の人たちを楽しませてきました。

7月20日の「虫送り」から笛、太鼓、鉦の稽古が始まります。時代が変わっても、熱気があり軽妙で迫力ある舞台は、見る人を引きつける素朴な民衆の力を発揮し続けています。

仮舞台が常設の舞楽殿に変わった夜の吉祥院天満宮は、熱狂した大勢の見物客を魅了したといえます。土蜘蛛から放たれた蜘蛛の糸、常に催促されがちな獅子の五丁とんぼ返り、基盤乗りと進む頃には、踊り手も太鼓も浴衣は汗でびしょ濡れで、見物客たちは残暑をもものともせず、妙技に引きずりこまれ、舞台と一体になって固唾を飲み、拍手が贈られます。

吉祥院六齋念仏は、芝居以上の魅力を強く放散して、根強い喜びを地元と与え続けています。そして、その思いを次世代に受継ぎ、さらに発展するよう、小・中・高校生が「吉祥院子ども六齋会」で伝統芸能の継承に取り組んでいます。

青年会から共親会に発展

吉祥院地域内の各村に六斎組があり、最盛期には東条組、西条組、南条組、北条組など八組の六斎組が吉祥院天満宮の夏祭には六斎奉納が行われていました。戦前までは隣の久世地域やその他の六斎組も吉祥院天満宮に来演もあり、8月25日から翌日になることもありました。

このように吉祥院は京都における六斎の一つの中心でありました。その頃、吉祥院においては、青年会が管掌しており、青年会は15歳から30歳ぐらいまでの青年で構成され、会長の統率のもとに団結を誇り、六斎の伝承にも大きな力を持っていました。



その後、青年会から共親会に発展しましたが、その当時、稽古も厳しい指導が続く中、得意、不得意によって役柄が決められました。

入会して2、3年の間は、「茶番」で、いわゆる雑用係が主な仕事で、それを務めながら稽古をつんでいくのですが、はじめは太鼓など打たせてもらえず、青竹を太鼓代わりに練習していました。30歳で青年会を離れ、以後、五年間は世話方として青年会の後輩の面倒を見、その後年寄となります。このうち特に技の優れた者が師匠になるしきたりで中老と呼ばれていました。この青年会がいわゆる六斎組であり、町内の青年はすべて青年会に加入するならわしで、厳しい稽古で上手にならなければひのき舞台には立てないとされていました。

菅原組も第二次大戦を境に衰退をはじめ、8組あった六斎組が戦後5組に減じ、昭和30年代に入ると菅原組のみが残ることとなりましたが、1980年（昭和55年）保存会や町内会、運動団体などの熱意と町内を挙げての取り組みで、若者たちが保存会組織へ入会し、伝承基盤の拡大強化が計られ、後継者難にもかかわらず、よく吉祥院六斎の輝かしい伝統を伝えることに成功しました。その後、吉祥院小学校教職員のかかわりで「子ども六斎会」が発足され、またNPO法人ふれあい吉祥院ネットワークのバックアップもあり、後継者育成の取り組みが進められています。

現在、吉祥院天満宮（4月25日、8月25日）で六斎奉納が行われており、客演を加えて2日間にわたった隆盛ぶりはもはやないが、さすがに六斎のメッカといわれただけとあって、この日ばかりは広い境内も立錫の余地もない賑いを呈しています。六斎奉納は、境内の舞楽殿といわれる専用舞台で行われますが、この舞台は昭和28年に創建されたもので、それまでは戸板を屋根とする仮舞台で六斎奉納が行われていました。

当時、地藏盆の頃には、分刻みで北から南へ順に演じてくるのが例であり、最後に羅生門にある矢取地藏で奉納したといえます。また木屋町の料亭に呼ばれ棚経をあげるのも盛んであり、鮎鶴では六斎を演ずる前に仏間に呼ばれ、必ず焼香太鼓をあげるのがならわしとなっていました。

この焼香太鼓（別名焼香念仏）は、六斎曲と異なる特別曲で、空也堂の傘下に加わって勤める念仏曲になります。一般にやられることはあまりありませんが、10月13日に町内の西教寺で六斎会員物故者の供養を勤めるならわしがあり、ここでは必ず焼香太鼓があげられていました。または、六斎関係者の家に不幸があった場合にも通夜の席でこれを手向けることになっていました。現在では、焼香太鼓をあげられる保存会員もいなくなり、特別曲として継承されていないのが残念です。